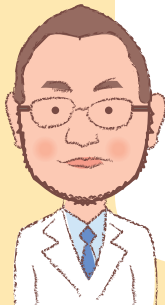
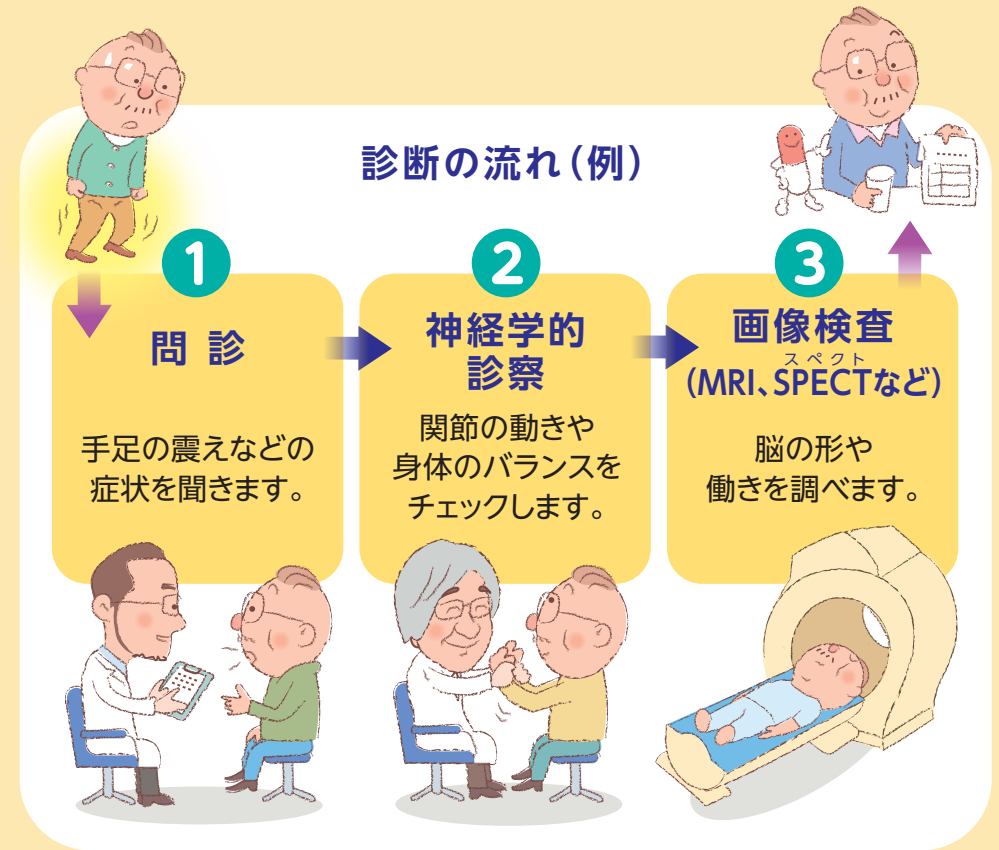


パーキンソン病の 症状、診断、治療って？



パーキンソン病が疑われる場合は、
お近くのかかりつけ医の先生か、
専門の脳神経内科医への
早期からの受診をお勧めします！



早期からの診断・治療で、**大きな支障なく生活**できます。

医療機関名

 nihon
medi+physics

提供：日本メジフィジックス株式会社
URL <https://www.nmp.co.jp/>

2021.2月作成

順天堂大学医学部附属順天堂医院脳神経内科 齊木臣二、服部信孝

本冊子は、パーキンソン病診療ガイドライン2018(日本神経学会編)の記載を参考に制作しました。
https://www.neurology-jp.org/guidelinem/parkinson_2018.html

Q パーキンソン病は どんな病気？

A 体の動きに障害があらわれる 病気です。

パーキンソン病は、脳の異常のために、体の動きに障害があらわれる病気です。現在、日本には約20万人の患者さんがいるといわれています。高齢者に多くみられる病気ですが、若い人でも発症することがあります。

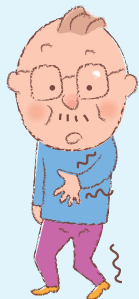
パーキンソン病の代表的な症状

動作が遅い・少ない・小さい



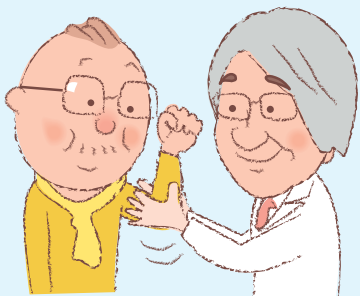
歩く速度が遅くなり、歩幅も狭くなります。腕の振りも小さくなります。

手足が震える(振戦)^{しんせん}



安静にしている時に、手や足に細かな震えが生じます。

ぎんこしゆく
筋固縮



患者さんの腕や足を動かそうとすると、関節がカクカクするような抵抗が感じられます。

バランスがとれない(姿勢反射障害)



重心がぐらついたときに、姿勢を立て直すことができず、そのまま倒れてしまいます。主に進行期に出現。

ゆっくりと進行するのが特徴です。

パーキンソン病は、何年もかけてゆっくりと進行する病気です。以前は、「パーキンソン病を発症すると、10年後には寝たきりになる」といわれていました。しかし、現在は効果的な治療薬もあるため、発症から長い年数にわたり、よい状態を保つことができます。それだけに、早い段階からきちんと治療を始めることが大切です。

パーキンソン病の進行の度合い(ヤール重症度分類)

- 軽度 1度** ▶ 症状は片側の手足のみ。日常生活への影響はごく軽度です。
- 2度** ▶ 症状が両側の手足に。多少の不便はあっても、従来どおりの日常生活を送ることができます。
- 3度** ▶ 歩行障害や姿勢反射障害があらわれます。活動がやや制限されますが、日常生活は自立しています。
- 4度** ▶ 両側の手足に強い症状があり、自力での生活は困難。介助が必要なことが多くなります。
- 重度 5度** ▶ 一人で立つことができなくなり、車椅子での生活や寝たきりになります。全面的介助が必要。



早く治療を始めれば、良好な状態が保たれ、大きな支障なく生活することができます。

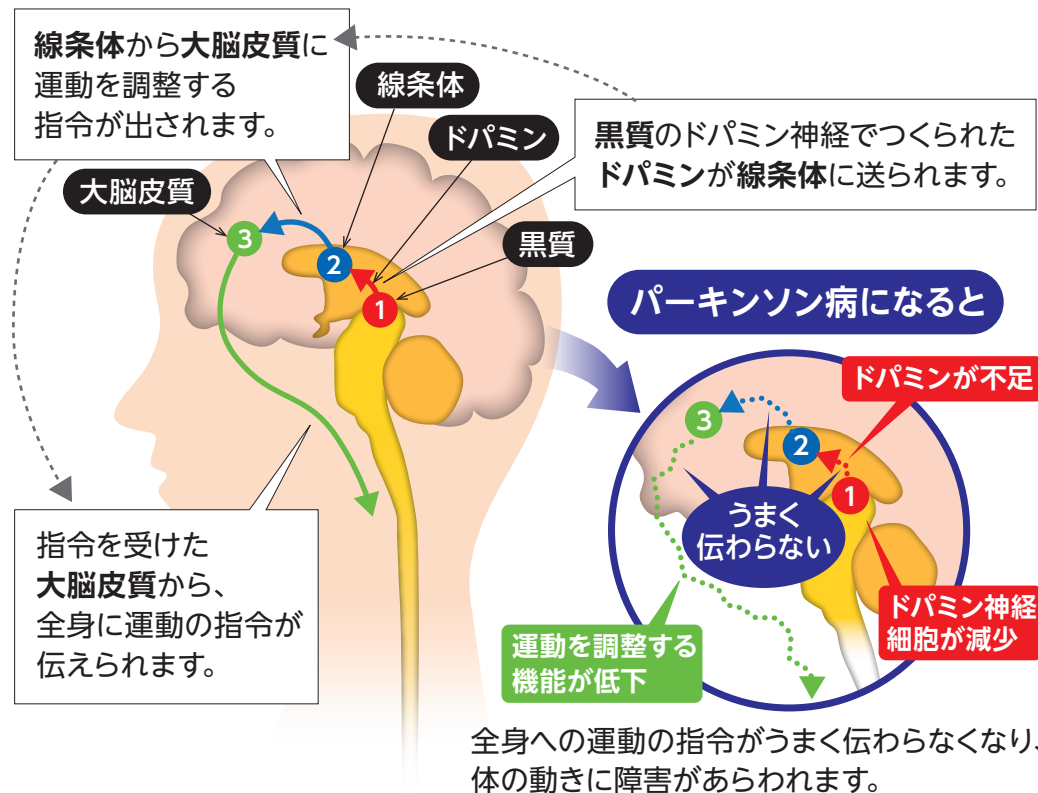


Q なぜパーキンソン病になるの？

A 原因は、脳内のドパミン神経細胞の減少です。

私たちが体を動かそうとすると、脳の「大脳皮質」から全身の筋肉に、運動の指令が伝わります。このとき、私たちの意図どおりに体が動くように、運動の調節を指令しているのが神経伝達物質の「ドパミン」です。ドパミンは、脳の奥の「黒質」にある「ドパミン神経」でつくられています。パーキンソン病になると、このドパミン神経細胞が減少し、ドパミンが十分につくられなくなります。その結果、運動の調節がうまくいかなくなり、体の動きに障害があらわれるのです。

体を動かすときの脳の働き



神経の障害に伴い、体の動きの障害以外にも多彩な症状が現れます。

パーキンソン病では、黒質のドパミン神経細胞の減少に加え、他の中枢神経や自律神経もダメージを受けます。これにより、手足の震えなどの代表的な症状に加え、精神症状や自律神経の障害があらわれることもあります。

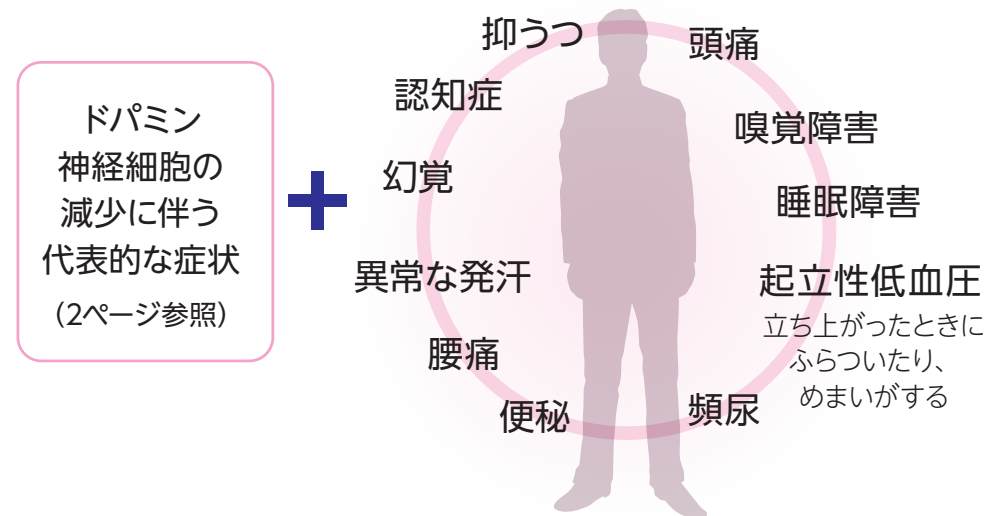
精神症状

「抑うつ」や「幻覚」を伴う場合があります。また、高齢で重度の患者さんでは、「認知症」を合併することもあります。

自律神経障害

最も多いのは「便秘」で、患者さんの8割程度にみられます。

多岐にわたるパーキンソン病の症状



Q どのように診断するの？

A パーキンソン病を確実に診断できる検査法は現時点で確立していませんが、一例として下記の流れで診断します。

診断の流れ(例)

1 問診

まず医師が患者さんに、「手足の震えや歩きにくさなどの症状がいつごろからあり、どのように進行したか」などについて質問します。



2 神経学的診察

次に、医師が患者さんの腕や足を動かして、筋固縮や姿勢反射など、パーキンソン病に特徴的な症状があるか調べます。



3 画像検査

パーキンソン病が疑われる場合には、以下の画像検査等で脳を詳しく調べます。

● **MRI** は脳の形を調べる検査で、パーキンソン病と健康な人とはほとんど区別がつかず、主にパーキンソン病と似た病気を除外するために使用されます。

● **SPECT** (スペクト) は脳の働き(機能)を調べる検査で、パーキンソン病の早期発見の手掛かりを得たり、パーキンソン病と似た病気を除外するために使用されます。



〈備考〉 必要に応じて、医師の判断により上記以外の検査等が追加される場合があります。

Q どのような治療をするの？

A 大きく分けて3つの治療法があります。

1 薬物療法

ドパミン系を補充する薬を始め、様々な薬があり、年齢や症状により組み合わせて使います。以下に代表的な2剤をご紹介します。

L-ドパ

脳内でドパミンに変化して、不足しているドパミンを補います。治療効果が高く、速効性に優れているのが特徴です。

ドパミンアゴニスト

ドパミンに似た作用をもつ薬です。治療効果がやや弱く、ゆっくり効くので、1日中穏やかで安定した効果を得られます。近年は内服薬に加え、注射薬と貼付薬も登場し、治療の選択肢が広がりました。

2 手術

薬物療法の副作用が強かったり、症状のコントロールが難しい場合には、手術が選択されることもあります。主に行われる「脳深部刺激療法」では、脳の奥のドパミンに関係する部位に電極を埋め込み、弱い電気刺激を与えることで運動機能を改善します。

3 リハビリテーション

パーキンソン病と診断されたら、すぐにリハビリテーションを始めることが大切です。有酸素運動やストレッチなどを積極的に行うことで、生活に支障のない状態を長く保つことができ、薬の使用も最小限ですみます。また、パーキンソン病になると、口の周りの動きの影響で、「声小さくなる」「早口になる」「声がかすれる」などの障害があらわれることもあります。これらの症状にもリハビリテーションが有効です。

バランスや筋力を保つ運動

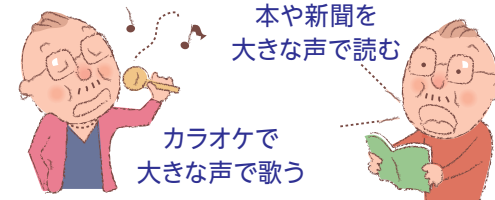
親指を上に向ける
できるだけ高く上げる



話し言葉のリハビリテーション

本や新聞を大きな声で読む

カラオケで大きな声で歌う



Q パーキンソン病は、診断後できるだけ早期に治療を開始すべきですか？

A パーキンソン病を治療しないままにするよりも、診断後できるだけ早期に治療開始することが推奨されています。早期の治療開始により運動症状が改善することが明らかですが、早期の治療開始にあたっては、薬の効果と副作用、コストなどのバランスなども含めて医師とよく相談して下さい。

